

マダラカゲロウ属の幼若幼虫が砂底に
みられること

津 田 松 苗

Occurrence of young larvae of *Ephemerella*
in sandy bottom of stream.

By Matsunae TSUDA

マダラカゲロウ属の幼若幼虫が砂底に みられること

津 田 松 苗

Occurrence of young larvae of *Ephemerella*
in sandy bottom of stream.
By Matsunae TSUDA

Ephemerella マダラカゲロウの幼虫は扁平匍匐型でふつつ川の瀬の石底にみられる。早瀬、平瀬の石に大形の(成熟した)幼虫や中形の幼虫がみられるのである。

一方、岸近くの、流れの緩いところは砂底になるが、そのようなところには大きい幼虫は決してみられない。ところが、このような砂底にも小さい(幼若な)幼虫は生息している場合のあるのに気がついた。

たとえば昭和41年4月29日、大和吉野川の上流、吉野郡川上村筏場地点の岸の砂底の例であるが、写真2のチリトリ型金網ですくつてある砂のなかから、写真1に示す73個体の

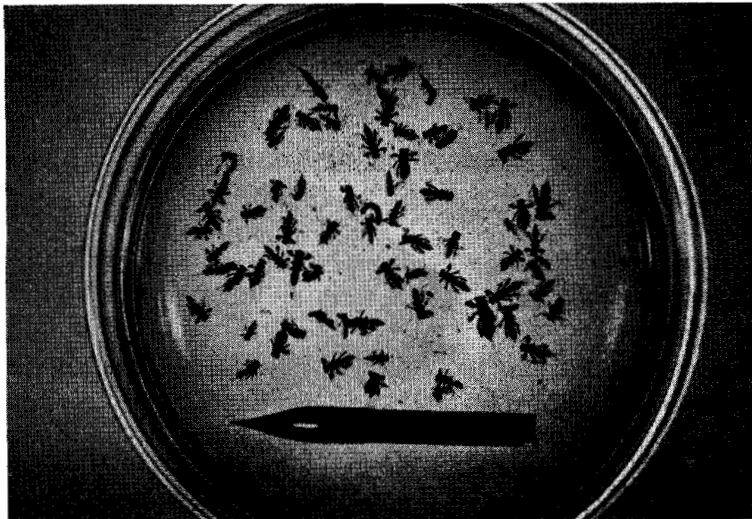


写真1

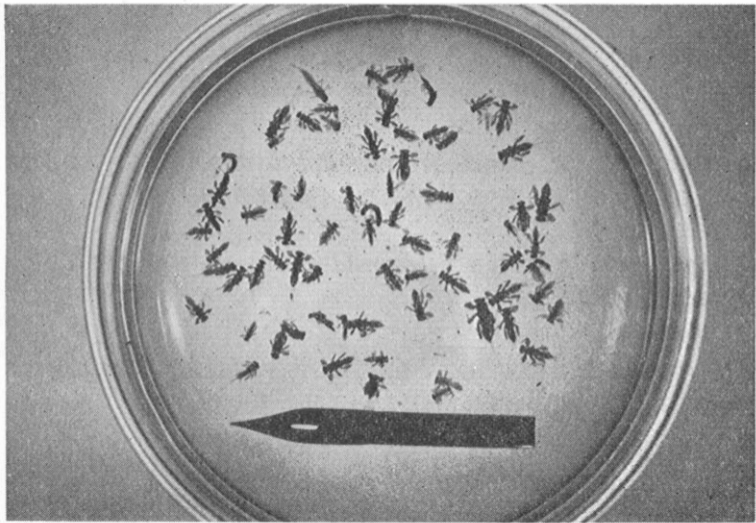


写真1



写真2

カゲロウ幼虫が発見された。金網の一番手前の一辺は 25 cm であるから、その砂の量も見当がつくと思う。この少量の砂のなかにかかなり多くの個体数がおるのである。この場合の種類とその個体数を示すと

<i>Ephemerella</i>	70個体	(<i>Ephemerella yoshinoensis</i> が大部分)
<i>Ecdyonurus</i>	2個体	
<i>Baetis</i>	1個体	

で、*Ephemerella* が大多数を占めている。写真の丸ペンの長さは 31mm で、これとくらべてわかるように、幼虫はいずれも体長 2.5~3.5mm 程度の幼若のものばかりである。

以上は 1例であるが、このようなことから次のことが考察される。

1. このような *Ephemerella* の幼若幼虫にとつては砂底でも十分その好適な生息場所であることが知られる。大きくなつた幼虫には不適な環境でも幼若幼虫には好適な環境なのだ。

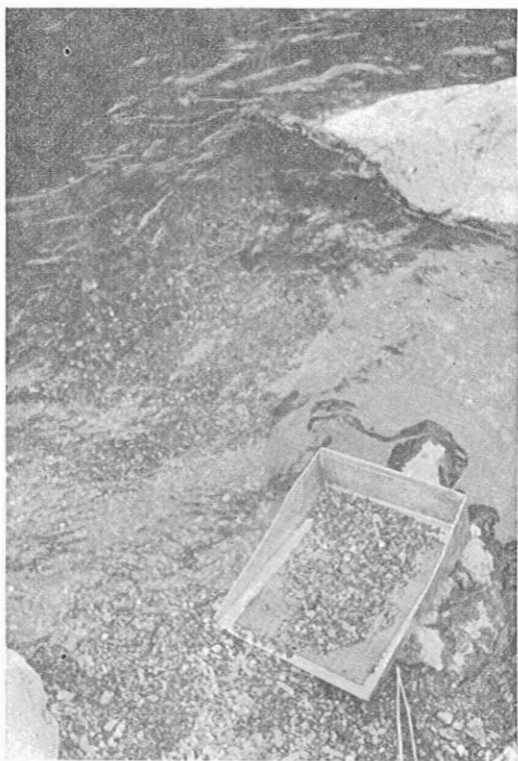


写真2

2. また、大きい幼虫には必要な大きい流速を、小さい幼虫は必ずしも必要としないことが考えられる。

3. *Ephemerella* 成虫によつて産み出された卵から孵化した幼虫はまず流れの緩い砂底にとどまる。そして大きくなるにつれ、流れの強い瀬の石の底に移ることになると思われる。

4. ただし以上のことは、どの川の部分でも妥当するとはいえない。現に、吉野川のこの調査の際に、これより下流の、入の波地点^{しおのは}、妹山地点^{いもやま}等では、砂底でこのような幼若虫の生息をみることはなかつた。砂底でも条件がよくなければならない。泥や有機腐泥や微生物・藻類の死骸などを含まない砂底でなければならぬようだ。それに、砂が躍るようでもいけない。

5. 一方、この岸よりの砂地に残っているのは *Ephemerella* が大部分で *Epeorus* はいないし、*Ecdyonurus* もごくわずかであることに注意がひかれる。*Epeorus* は *Ephemerella* よりもさらに扁平でさらに流れに強く、この程度の大きさの幼虫も早瀬に行つてしまい、流れの緩い砂地にはとどまらないのである。実際、早瀬の石の裏側に *Epeorus* の小さい幼虫をたくさんみることができるのである。

(筆者：津田松苗，奈良女子大学理学部動物学教室，奈良市：Matsunae TSUDA, Zoological Institute, Faculty of Science, Nara Women's University, Nara City).